

《 研究会報告 》

2008(平成20)年度宗教倫理学会研究プロジェクト委員会は、昨年度に引き続き、同じプロジェクト・テーマおよび趣旨のもとに都合6回の研究会を開催し、大きな成果を得た。ここに、それぞれの研究発表者によるレジュメ原稿を掲載して報告とする。

〔テーマ〕:「祈りとモダニティ 宗教から現代を考える 」

第1回:2008年3月28日(金)〔キャンパスプラザ京都〕

現代における親鸞理解と祈りの問題

徳永道雄(京都女子大学)

親鸞の浄土教において「祈り」という言葉あるいは概念ほどやっかいなものはない。例えば、浄土真宗は「祈り」ということを言わない宗派として広く知られているにもかかわらず、親鸞自身が「いのり」という言葉を肯定的に用いているという事実があることも否定できないのである。いわゆる御利益願いの現世祈禱という日本仏教の通弊とも言うべき行為を親鸞ほど強く否定した仏教者はなく、またそれは広く認められていることでもあるが、他方では親鸞は「世のいのり」という表現をもって「祈り」を肯定的に用いているのである。これは本願念仏が人びとに安穩をもたらす行為であるという文脈において用いられている。さらに言えば、親鸞思想における宗教性の根源であるというべき阿弥陀仏の「本願」そのものが「いのり」であるという肯定的な解釈も十分に成立する。すなわち、阿弥陀仏の本願は一切の衆生を平等に救わんとする宇宙的な「いのり」であるということである。D.T. Suzuki の英訳『教行信証』に阿弥陀仏の本願を Original Prayer と翻訳していることも、その傍証となるのではなからうか。

以上のことを「行水の湯といっしょに赤子をも流してしまう」という俗諺に即して言うと、これを親鸞における「祈り」の否定的な用法と肯定的な用法の両方に適用することができるであろう。すなわち、もしも「祈り」という言葉の使用を認めるとすれば、それはこの言葉の現世祈禱的な用法を認めるという理解に直結してしまうであろう。もちろん、この場合の「赤子」は浄土真宗においては現世祈禱が強く否定されているという事実である。その反対に、もしも「祈り」という言葉の使用を禁じるとすれば、阿弥陀仏の本願そのものが一種の「祈り」であり、その活動態であるところの衆生の「信」や「念仏」もまたその「祈り」の顕現であるという親鸞思想の中核もまた同時に否定されてしまうであろう。

このいずれの場合においても、湯といっしょに「赤子」を流してしまわないことが肝要であることはいうまでもないが、「祈り」に関してそれをいかにして回避するかを追求する教学が喫緊のものとして要請されているのが、現代における浄土真宗の課題であることは言うまでもない。

第2回：2008年4月18日（金）〔キャンパスプラザ京都〕

禅における祈りとモダニティの問題

安永 祖堂（花園大学）

「祈り」とは何か？「祈り」を人間と神との内面的接触、あるいは対話と把捉するかぎり、禅と「祈り」の接点はあるか？。ただし究極的かつ超自然的な力、さらには働きとの関わりと解釈するならば、禅にあっても「祈り」は成立し得るのではないか。坐禅は「沈黙の祈り」であると首肯し得るだろう。たとえば「射禱」（『不可知の雲』）のような短い聖句を繰り返す「祈り」のスタイルは、臨済禅の初関の公案、趙州無字や隻手音声などの工夫を髣髴とさせる。ただしそのようなキリスト教神秘主義の「祈り」で、身体的位置づけが禅のそれと決定的に相違する点は留意すべきであろう。坐禅は調身・調息・調心の行であって、肉体から乖離した靈的観想には止まらない。

「今日の近代は、近代化の外部にあってその与件と考えられて来た宗教や家族といったあらゆる伝統や自然を自らの内部に取り込み、」（研究プロジェクト惹句より）あるいは「取り込まれた」のではなく、むしろ延命を企図して近代に「取り入れた」のだと抗弁するかもしれないが、いずれにせよ現在の伝統宗教が「風景」に成り下がってしまったことは間違いない。ここに禅の立場からあえて「ラディカル」という視座を提起してみたい。「ラディカル」すなわち、根源的かつ急進的である。そもそも宗教は麻薬のように人を飼い馴らす仕掛けであると喝破し、禅に宗教の枠に収まらない劇薬の匂いがすると指摘した識者がいる。ところが本来の生死脱得の「修行」から人格向上の「修養」へ、そして理知主義的「教養」へと、禅はひたすら毒を抜かれ去勢され続けてもいる。しかし、もともと世俗の価値観とは一線を画するものが宗教であったはずであり、「だれでも父、母、妻、子、兄弟、姉、妹、さらに自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることはできない」（ルカによる福音書14 - 25）と説かれてもいる。ゆえに宗教の持つ、善悪の彼方の根源的な次元に立ち返ることが、時代の奔流に先鞭をつける急進的なエネルギーを再造させる方途になり得るのではないかと思考する。

第3回：2008年5月16日（金）〔キャンパスプラザ京都〕

愛と開集合 十字架の神学と一般位相

落合 仁 司（同志社大学）

シモーヌ・ヴェイユの神学は20世紀における「十字架の神学」の再発見の一環として位置付けられる。キリスト教の最も根本的な使信は、神が人間の苦しみを共に苦しむ、すなわち神の共苦 compassion にある。人間イエスが十字架に付けられ苦しみ死んだ時、神も共に苦しみ死んだと考える。そこにキリスト教の最も根本的な使信を見るのである。

思えば人の苦しみを共に苦しむとは、その人を完全に愛することに他ならない。神の共苦とは、神の愛の完成に他ならないのである。しかし人の苦しみを共に苦しむためには、自らもまた苦しむことを知らねばならない。自ら苦しむことの無い者に、人の苦しみを苦しむことは不可能であり、人を完全に愛することも出来ない。

果たして神は苦しむのか。苦しむとは何らかの限界に突き当たることである。神はこの世界を創造することも創造しないことも可能なほどの無限の力を有する。その無限の力を有する神が何らかの限界に突き当たることなどありうるのか。差し当たり神が自らの意志で無限の力を放棄し、自らを有限の苦しみに置いたと考える他はない。

しかし無限の力を有する者が同時に有限の苦しみを受ける者であることは端的な論理矛盾である。神はたとえ自らの意志であっても無限の力を有する者でありながら同時に有限の苦しみを受ける者ではありえない。何故なら神もまたこの世界を創造すると同時に創造しないことは出来ない、すなわち論理矛盾を犯すことは不可能だからである。

それではキリスト教の根本使信は論理矛盾に過ぎないのか。宗教は単なる論理矛盾に過ぎないと考えるのであれば議論は終わりである。しかし神学は宗教を論理的に一貫させる試みではなかったか。もしそうであるならば、シモーヌの兄アンドレ・ヴェイユの数学、分けても彼を中心とするブルバキの位相空間論が援けになる。

位相空間とは、無限集合が無限であるがままで限界を有しうる空間である。したがって神を位相空間として表現することが許されるならば、神は無限であると同時に限界を有する、すなわち人間を絶対的に超越しながら同時に人間の苦しみを共苦しむことになる。キリスト教の根本使信は論理的に一貫させられるのである。

さらに位相空間論によれば、位相空間がコンパクトであるならば、それをあたかも有限であるかのように考えることさえ可能となる。したがって位相空間として表現された神がコンパクトであるならば、神はあたかも有限な人間と同じように人の苦しみに共苦、すなわちコンパッションし、人を愛することが出来ることになるのである。

神を位相空間として表現すること、このことに懐疑と反感を懐かれる方もおられよう。その場合、神を位相空間として表現することを、神を位相空間に譬えることと理解してはどうだろうか。数学を神の愛を語る現代の譬 *parabole* と考えてみるのである。

第4回：2008年6月20日（金）〔キャンパスプラザ京都〕

宗教の創造としてのモダニティー
- 申命記改革とその神学的精神 -

中村 信博（同志社女子大学）

一般に、モダニティーは世俗化の過程として理解される。本発表においては、古代イスラエルにおける宗教（国家）改革について紹介し、その時代背景と思想がどのようにヘブライ語聖書に影響を及ぼしたのかを論じることで、モダニティーを世俗化とは逆の宗教的再創造過程として定義し得る可能性があることを類比的に考察した。これによって、西欧近代もまた世俗化と宗教理念再構築を胚胎したひとつの緊張の時代として、検討し直すことができるのではないかと考えてみたい。

ヘブライ語聖書には、音楽療法の起源とされる物語が叙述されている。サウル王は従者ダビデの奏でる豎琴の音色によって癒された（サムエル記上）。しかし、物語はこの出来事の直前に、すでに神（ヤハウェ）の霊が王から離脱したことを告げている。つまり、王の苦悩は、王自身の理解とは別に、超越的な神との関係において理解されなければならなかった。それは、時系列における事象の連鎖（原因 - 結果）によっては把握しきれない超越的原因を暗示している。

この物語は、研究者が「申命記主義的歴史記述」と呼ぶ、ヘブライ語聖書中に抽出される広範な歴史文学の一部である。名高いバビロン捕囚（国家崩壊）直前の前7世紀後半、南ユダ国王ヨシヤはアッシリア帝国の衰亡期に乗じて国家再建を計った。いわゆる申命記改革である。それは政治と宗教との一元的強化を目的としたが、その青写真である「律法の書（原申命記）」は神殿修築工事の現場から発見されたものであったという（列王記下）。エピソードの真偽はともかく、それは信仰的逸脱にたいしてのはげしい批判を内容とした。古代イスラエルは国家崩壊（バビロン捕囚）の危機に直面することで、歴史を一定の神学的基準から省察・評価する基準を確立したとされる。「申命記主義的歴史記述」は、この基準によって編纂された歴史文学であった。

サウル王を豎琴によって慰めたダビデの物語には、「王と従者」という二人称的關係と礼拝楽器としての豎琴による宗教性がそれぞれに暗喩されている。それは、歴史（現実・世俗）軸と超越（宗教・神）軸が交差するところに表象化されたものであった。そこにはサウル個人の治癒が物語られているだけでなく、むしろ礼拝共同体としての民全体が、超越的次元へと回復（復帰）されることを隠れた主題としていたと解釈することもできるだろう。むしろ、音楽療法というモダニティーが「ダビデの豎琴」を発見したと言うべきかもしれない。同様に、ヘブライ語聖書のなかに「申命記主義歴史記述」を発見したのも、18世紀以降の近代聖書学（モダニティー）であった。

だから、モダニティーを単純に世俗化として理解することには慎重でありたい。その事例とし

て考察した古代イスラエルにおける国家改革は、国家崩壊期における伝統回帰への試みでもあった。それは、歴史の移行期における現実と精神性の緊張であり、その均衡が精神性にと傾斜すれば、宗教的創造過程としての側面を強調しなければならなくなる。その意味で、妙な言い方ではあるが、古代におけるモダニティーは、宗教（神）を発見し、神を社会のしかるべき場所に定位する過程でもあったと理解することができるだろう。

したがって、豎琴をめぐるサムエル記の挿話もまた、単純に療法上の効果を物語っているとは考えがたい。王宮（世俗領域）における神礼拝という矛盾に満ちた緊張が、豎琴という楽器によって表象化されていたと考えられるのである。物語は、この楽器をめぐる王サウルとのちにかれの地位を襲うことになるダビデとの葛藤を描きながら、古代世界に潜むモダニティーの矛盾を語っていた。その緊張と矛盾は、神という根源と崩壊にと向かう世俗社会の間を激しく揺れ動いたに違いない。

こうして、古代イスラエルにおける国家改革を類比的に近代化の過程として考えてみれば、モダニティーは単純に近代化や世俗化という響きのなかで理解されるべきものではないことがわかる。そこに、伝統への回帰と宗教性（神）の発見をも内包している可能性についても考えておきたいのである。

第 5 回：2008 年 7 月 18 日（金）〔キャンパスプラザ京都〕

現代宗教の理解と「祈り」の概念

澤 井 義 次（天理大学）

宗教学は 19 世紀後半、近代西洋社会で成立したこともあり、宗教概念としての「祈り」は、おもにキリスト教的な概念的枠組みの中から汲み出されたものである。ここでは、現代宗教の動態を理解するうえで、「祈り」の概念の妥当性と有効性をめぐって考察をおこなう。とりわけ、今日でもなお、宗教研究の中で引用される F・ハイラー（F. Heiler）の古典的名著『祈り』（*Das Gebet*, 1918）を取り上げる。まず、ハイラーの宗教現象学の理論的特徴について論じ、そのうえで「祈り」の意味と構造を理解するために、「祈り」の概念的枠組みを諸宗教現象の脈絡へ引き戻して批判的に再考したい。

ハイラーの宗教現象学的研究は「祈り」を諸宗教の核心に据えることによって、西洋のキリスト教ばかりでなく、東洋の諸宗教の特質も理解しようとした。こうしたアプローチの仕方に、その方法論的な特徴がある。彼によれば、「祈り」の体験の内的構造は、超越的実在として的人格神と人間の相互行為として捉えられる。ハイラーの宗教論を貫く理論的基軸は、「祈り」こそが宗教経験の直接的な表現であるという点にある。これは古典的な宗教現象学理論や近代宗教論を特徴づけるものでもある。ただ、彼の理論が抱える方法論的な問題点は、彼が「祈り」を「儀礼」と

の二項対立的な視座から把握し、宗教の内的経験としての祈りとその外的表現としての儀礼的行為を対立させて捉えようとしたことにある。ところが、宗教の内的経験の優位性という価値判断を伴う先入観から、祈りを儀礼と識別すべきではないことは、現代日本の祭りやヒンドゥー教のバクティなどの具体的な宗教現象に注目すれば明らかであろう。

また宗教現象において、「祈り」は個人の「自発的な祈り」から、儀礼における「祈りのパターン」に至るまで、きわめて幅の広さがある。具体的な祈りは、祈りの自発性と祈りのパターン性という両極のあいだを揺れ動く。「祈り」の意味と構造を検討するとき、「祈り」の多義性を認識する必要がある。さらに、ハイラーが提示した「祈り」の概念的枠組みは、現代の宗教学のおもな研究動向の中でも、特に聖典論の地平から再検討されるべきであろう。聖典研究の領域では、従来の聖典論のモデルとなった「書かれた聖典」のほかに、「語られる聖典」が注目されている。「語られる聖典」は、例えば、ヒンドゥー教や仏教の伝統において、師から弟子へ、またその弟子が師となって次の世代へ、とパロール的な状況の中で継承されてきた。聖典のこうした口頭伝承性という事実に着目するとき、祈りと言葉の関わりが新たな地平へと引き出される。「語られる聖典」に関する具体的な宗教現象は、インドの宗教伝統以外にも、イスラームの『コーラン』や天理教の原典「みかぐらうた」の暗誦などにも見られる。こうした「語られる聖典」の特徴は、「祈り」に関する従来の宗教研究では、ほとんど本格的に研究されてこなかったが、現代宗教のリアリティを理解するうえで不可欠な視座であろう。

第6回：2008年9月19日（金）〔キャンパスプラザ京都〕

仏教における伝統と近代の相克--- 国際女性出家制度確立運動

岩本 明美（南山宗教文化研究所）

仏教の西洋への伝播によって、新しい形態の仏教が誕生するとともに、アジアの正統派仏教は「伝統」の見直しを迫られることとなった。見直されるべき「伝統」とは、女性の出家制度である。現在、三種の正統派伝統仏教がある（現代の三乗）。テーラワーダ（小乗）仏教と、大乘仏教と、チベット（金剛乗）仏教である。それぞれ、ニカーヤ（部派）仏教の律蔵である、南方上座部律と法蔵部律と根本有部律にしたがって授戒儀式を行っている。ビクニ戒授戒制度が確立されているのは大乘のみであり、テーラワーダとチベット仏教を实践するビクニになりたい女性修行者は、大乘でビクニの資格を得てきた。

ブッダの教えの実践による世界平和の推進を理念に、出家制度における男女格差の是正を目標の一つに、サキャディータ(Sakyadhita)と呼ばれる国際女性仏教者協会が、欧米の女性出家者を中心に1987年にブッダガヤで立ち上げられた。本発表では、拙稿「仏教比丘尼戒復興運動と2007年ハンブルグ国際会議」（『南山宗教文化研究所研究所報』18号, 2008年;

http://www.nanzan-u.ac.jp/SHUBUNKEN/Shuppanbutsu/Shoho_to_burechin/pdf/S18-Iwamoto.pdf)に基づき、サキャディータの二十年に及ぶ女性出家制度確立運動と2007年夏に開催されたこの運動の総決算ともいべき会議について紹介し、この運動の問題点と今後取り得る方向について考察した。

現在ビクニサンガをもたない伝統が女性出家制度を確立するためには、大乘の援助を受けるのが合理的であるが、ニカーヤ律の伝統の混交には長老ビクからの激しい抵抗などがある。会議の主たる目的は、律文献を精査してチベット仏教にビクニ戒を導入する正統的な手続きを検討し、その結果についてサキャディータをその創設以来支援してきたダライ・ラマ14世の判断を仰ぐことであった。ダライ・ラマは、時期尚早として授戒問題は棚上げにし、中国法蔵部律でビクニ戒を受けたチベット仏教を實踐する西洋人修行者たちをチベットの法蔵部のビクニとして承認したうえで、彼女たちにビクニサンガの根本的儀式を始める許可を与えた。

結局、チベットの正統である根本有部律によるビクニ戒授戒制度の確立という目標からすれば、不十分な成果しか得られなかったことになるが、チベットの法蔵部のビクニとして新しい仏教をスタートさせる正式な資格を手に入れたことも事実である。この事実を最大限肯定的に受け止め、当初の目標は捨て去り、世界平和を推進するにふさわしい形態の仏教を創造してゆくのがよいのではなかろうか。

* 筆者は、2007年の7月初旬から六週間、ハイデルベルク・アカデミーに招聘された。招聘者のLothar Ledderose教授のご好意により、ハンブルク国際会議への参加が可能となった。